教育課題研究

豊かに生きる児童生徒の育成を目指す新たな学びに対応する教育の在り方
～新学習指導要領を踏まえた授業づくりをとおして～
（2022 年度）

研究のまとめ

2023 年 3 月

宮崎県立みやざき中央支援学校

目　次

ページ

はじめに　学校長より

Ⅰ　今年度の研究について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅱ　研究の実際

1　ICT 管理・運用・活用研究班　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

2　ICT 実践研究班（小・中・高）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

3　個別の指導計画に関する研究班　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０

4　「新しい生活様式」に関する研究班　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

5　音楽科研究班　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

6　作業学習の開発に関する研究班　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３

7　寄宿舎教育研究班　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

Ⅲ　研究のまとめと今後の展望　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

巻末資料　①　「ICT 実践研究班　実践事例集」

巻末資料　②　「おすすめアプリ紹介」

巻末資料　③　「音楽科　授業実践　Q＆A」

は　じ　め　に

新型コロナウイルス感染による影響も3年目となる中、今年度の校内研究を行ってきました。そのため、制約を受けた状態での実践の範囲内で研究を進めてきました。今年度は、昨年度に引き続く研究の2年目として「豊かに生きる児童生徒の育成を目指す新たな学びに対応する教育の在り方～新学習指導要領をふまえた授業づくりをとおして～」を主題として取り組んできました。

具体的には、大きく2つの研究「GIGAスクール構想プロジェクト研究班」と「つながる授業づくり研究班」に分かれ、寄宿舎は例年どおり別途、独自の研究に取り組みました。まず、「GIGAスクール構想プロジェクト研究班」においては、「ICT実践研究班」を学部別に設ける一方、「管理・運用・活用研究班」を教育情報部を中心として構成した組織編成としました。また、「つながる授業づくり研究班」においては、「作業学習の開発研究班」「個別の指導計画に関する研究班」「『新しい生活様式』に関する研究班」「音楽科研究班」の4班編制としました。寄宿舎においては、「自立生活棟」「寄宿舎体験の実施」「寄宿舎紹介動画」「寄宿舎新聞の発行」「寄宿舎説明資料の作成」をテーマに研究を進めました。

いずれの研究班においても、日々の実践と深く関連付けて取り組み、日常の授業や教育実践の実際に直接つながる研究内容となるよう心がけることにより、本校の教育目標である「自ら学び、心豊かでたくましく生きる児童生徒の育成」につながるよう取り組んできました。

全体として、完全に満足できる進度ではありませんでしたが、ICT活用をはじめとして、日常の実践の変化に大きく影響して、各教室の授業風景が変わったと思われるほどの成果もあったように思います。また、九州地区音楽教育研究大会特別支援教育部会の開催に本校が中心となって関わった点については、県全体の音楽教育の発展につながる取組となりました。

一方で、現行の学習指導要領の実施に関して内容を深化させるほどの取組となったかについては、まだまだ課題があったように思います。引き続き重要課題として校内で強く意識し実践に生かしていく必要があります。

研究としては、2年目として一区切りとなりますが、これらの成果と課題をさらに昇華させて、今後、次の段階の実践研究に発展させていければと思います。

なお、この研究のまとめにおいては、実際に役立つ資料を目指して、巻末資料として「実践事例集」や「おすすめアプリ」「授業実践Q＆A」に力を入れて作成しました。

本研究のまとめをご覧いただき参考にしていただければ幸いです。

結びに、研究にご指導、ご支援をいただいた関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和5年3月

宮崎県立みやざき中央支援学校
校　長　　酒　井　裕　市

Ⅰ　研究について

１　研究主題

「豊かに生きる児童生徒の育成を目指す新たな学びに対応する教育の在り方

～新学習指導要領を踏まえた授業づくりをとおして～」（2 年次／2 年）

２　主題設定の理由

学習指導要領が改訂され、2020 年度の小学部における全面実施を皮切りに、2021 年度は中学部、そして高等部においては 2022 年度入学生から順次実施されることは、周知のとおりである

学習指導要領の総則には、育成を目指す資質・能力の柱として、「①知識及び技能が習得されるようにすること」、「②思考力・判断力・表現力等を育成すること」、「③学びに向かう力、人間性等を涵養すること」の三点が挙げられ、これらの目指す視点を明確にしながら教育活動の充実を図るものと示されている。

本校は昨年度、「豊かに生きる児童生徒の育成を目指す新たな学びに対応する教育の在り方

～新学習指導要領を踏まえた授業づくりをとおして～」を研究主題として、以下の三つの課題について取り組みを行ってきた。

第 1 に、学習指導要領への対応についてである。改訂された学習指導要領には「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「子ども一人一人の発達をどのように支援するか」「何が身に付いたか」「実施するために何が必要か」という六つの点の枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められている。このような学習指導要領の改訂を踏まえ、児童生徒の自立と社会参加に向けてよりよい教育課程の編成を目指すことと、児童生徒にどのような資質・能力を育む必要があるのかを明らかにしながら授業づくりを行っていく必要があると考える。

第 2 に、新たな学びに対する教育の在り方の模索である。近年、グローバル化や人工知能（AI）をはじめとする技術革新が急速に進み、社会の変化を予測することが困難な時代と言われている。そのような時代の中で、子供たちには、社会の変化を前向きに受け止め、感性を働かせながら主体的に関わり、より豊かに生きていくための力を身に付けていくことが必要と言われている。また、変化の激しい時代を生き抜いていく子供たちには、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく力を培うことが求められている。このような力は、これまでも学校教育において育成を目指してきた「生きる力」であり、この「生きる力」を改めて捉え直していく必要性も改訂された学習指導要領には記されている。学習指導要領の改訂と共に、子供たちの新しい学びも同時にスタートしていくことになる。この新しい学びの実現に向けて、学校教育をどのように展開していく必要があるのかを模索していくことも必須である。

第 3 に、ICT に関する課題である。「GIGA スクール構想」も導入され、「1 人 1 台端末」の学習環境の下での新たな学びが本格的に始動している。それに伴って、運用に向けてのルール作

りをはじめとする環境の整備や ICT を活用した学習活動の一層の充実も急がれ、本校の喫緊の課題の一つとも言えよう。

今年度も引き続き、同じ研究主題の元、研究組織を大きく 2 つに再編制し研究に取り組むことにした。

一つは、県の研究指定を受けて行う GIGA スクール構想プロジェクト研究である。この GIGA スクール構想プロジェクト研究では、昨年度に引き続き、機器の運用や使い方のルールなどの整備や検討を行う

もう一つは、日々の授業につながる研究として、「個別の指導計画に関する研究」、「『新しい生活様式』に関する研究」、「音楽科研究」「作業学習の開発」の 4 つの班で研究に取り組むこととした。「『新しい生活様式』に関する研究」、「音楽科研究」、「作業学習の開発」に関しては、昨年度から継続し、今年度も行うこととした。また、今年度から本校の指導計画の様式が変更になったことを踏まえて、その背景やどのような書き方をしたらよいのかなどを含め、個別の指導計画に関する研究を行う班を設定した。

本校の学校教育目標にもある「自ら学び、心豊かでたくましく生きる児童生徒の育成」、そして主体的に学ぶ児童生徒の育成のためには、やはり日々の授業が要となる。授業づくりを大切にしながら、児童生徒一人一人の生きる力の育成を目指していきたいと考え、本研究主題を設定した。

3　研究の仮説

各研究チームの取組において、児童生徒の実態や授業実践上の課題からテーマを設定して研究に取り組んだり、新しい視点を取り入れた教育課程の検証を行ったりすることで、より一層児童生徒の自立と社会参加を目指したと授業づくりが実現すると同時に、豊かに生きる児童生徒の育成が図れるのではないか。

4　研究組織（図 1 参照）

本校の研究組織については、大きく GIGA スクール構想プロジェクト研究とつながる授業づくり研究に分かれて行うこととした。また、GIGA スクール構想プロジェクト研究では、管理・運用・活用研究班と ICT 活用実践研究班に分かれることとした。つながる授業づくり研究班では、小・中・高の職員の縦割りで編成した「個別の指導計画に関する研究」、「『新しい生活様式』に関する研究」、「音楽科研究」の 3 つの研究班と高等部職業コースの職員を中心に編成した「作業学習の開発に関する研究」の合わせて 4 つの班で研究に取り組むこととした。

寄宿舎の研究については、寄宿舎独自の研究主題を設定して取り組むことにした。全体研究会や研究推進委員会への出会は、従来どおりとし、学校と寄宿舎との連携や情報の共有に努めることにしている。

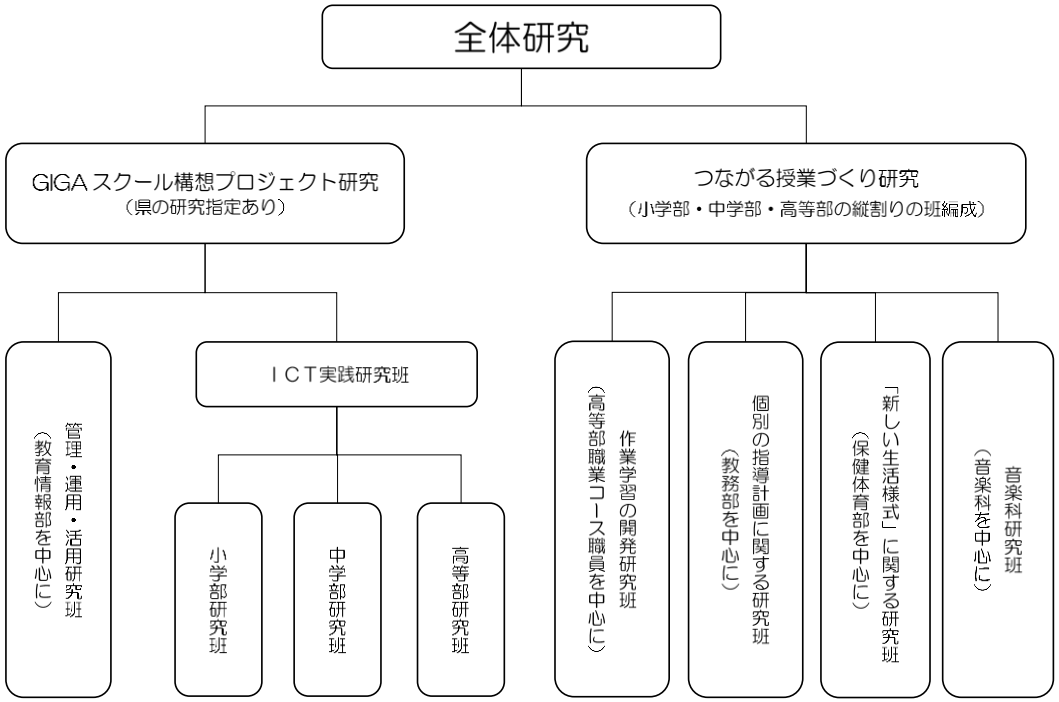
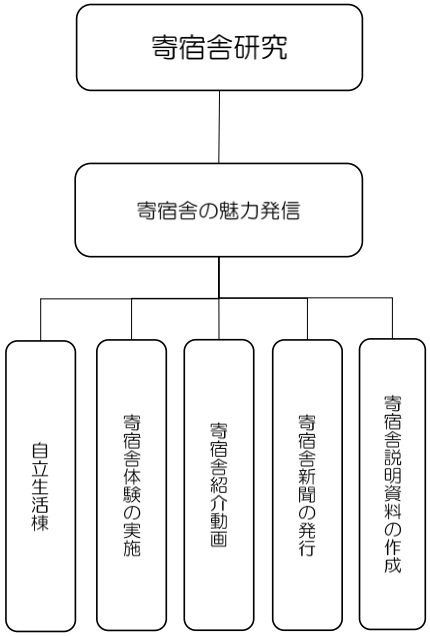
	本校	寄宿舎
研究主題	豊かに生きる児童生徒の育成を目指す新たな学びに対応する教育の在り方（二年次） ～新学習指導要領を踏まえた授業づくりをとおして～	これからの寄宿舎の在り方
研究組織		
備考	○　ICT の活用に関しては、県の研究指定を受けており、授業公開をする ○　音楽科研究班については、九音連の発表がある。 ○　個別の指導計画に関する研究に関しては、夏季休業中及び年度末に全体に向けての情報提供、共通理解の場を設ける。 ○　年度末の研究報告会については、ICT 活用研究班、実践研究班、新しい生活様式、音楽科の報告を行う。	○　寄宿舎体験は２学期実施予定 ○　寄宿舎新聞は月に１回発行予定 ○　寄宿舎説明資料は１学期中に作成予定

図１　令和４年度　校内研究組織

5　研究計画

（1）研究期間

本研究は、令和 3 年度から令和 4 年度までの 2 か年で取り組んでいる研究である。

（2）研究計画

研究計画については、以下のとおりに設定をした。

日付	時間（分）	内容	備考
4/6（水）	50	【研究担当者会】研究計画立案	
4/22（金）	50	【研究担当者会】研究計画検討	
5/17(火)	30	第 1 回　研究推進委員会 ・　今年度の全体研究について	
5/24(火)	30	【研究担当者会】研究計画検討（必要に応じて）	
5/27(金)	50	研究全体会（今年度の研究について提案）	
6/7(火)	30	チーム別研究	
6/22(水)	30	チーム別研究（高等部現場実習中なので） →　各研究グループで検討（実施可能であれば）	
7/12（火）	30	チーム別研究	
夏季休業中	それぞれで設定する	全体研修 ・　個別の指導計画に関する研修（教務部中心） ・　ICT 活用に関する研修（教育情報部中心）	研究計画書提出
	50	チーム別研究	
	50		
8/26（金） 13:30～15:30	120	全体研修（外部講師招聘） 研修①ICT にかかわる研修 研修②発達障がいのある児童生徒への対応	
9/6(火)	30	チーム別研究	
9/15(木)	30	チーム別研究	
9/27(火)	30④16:15～	チーム別研究	
10/12(水)	30④16:15～	チーム別研究	
11/10(木)	30④16:15～	チーム別研究	
12/9(金)	45③16:00～	チーム別研究	
冬季休業中	50	チーム別研究（公開研究に向けての資料作成等）	
1/17(火)	30④16:15～	チーム別研究（公開研究に向けての資料作成等）	
1/27(金)	45③16:00～	全体研修 ・　個別の指導計画に関する研修（教務部中心）	研究報告書提出
2/24（金）	未定	全体報告会 授業公開	
3/17(金)	30④16:15～	研究推進委員会② ・　今年度の研究のまとめ ・　次年度に向けての方向性等の検討	

Ⅱ　研究の実際

1　ICT 管理・運用・活用研究班

テーマ	校内の ICT 活用能力の推進～授業場面での効果的な活用を目指して～
研究目標	校内の ICT 活用能力の推進を図る
研究の実際	（活用推進に向けて） ・　アンケートを実施し、校内の ICT 活用ニーズを集約した（2 回）。 ・　アンケート結果をもとに、ICT 活用についてのアプリや活用事例の記事を作成し、ミライムで紹介した。 ・　夏季休業中と冬期休業中に ICT 活用について勉強会を実施した。 ・　ミライムにて書籍や動画の情報発信を行った。 ・　情報モラルについての研修を行った。 （管理・運用について） ・　機器やデータの管理方法についての情報をミライムで周知した。 ・　情報モラルについての職員向けの研修を行った。 ・　クラウド活用についての研修や呼びかけを行った。
成果	（校内のＩＣＴ活用の推進について） ・　アンケートを実施することで、職員のニーズを把握することができた。 ・　活用されている場面が増えてきているのを実感できるようになった。 （研修、勉強会について） ・　勉強会には毎回たくさんの方が参加され、関心の高さを感じた。 ・　ＩＣＴの特性上直接教えていただいた方が理解しやすいという先生方も多く、勉強会という実施形態は良かった。 （職員同士の学びあいについて） ・　班の先生方との CT の活用方法や状況について知ることができ、新たな気づきを得たり勉強になったりすることが多くあった。 ・　アプリや活用事例を知ることで、指導で活用できる幅が広がった。 （管理・運用について） ・　研修や呼びかけを行ったことで、少しずつグーグルドライブやクラウドの活用がすすんでいる。 ・　機器の管理について意識付けすることができた
課題	（「ＩＣＴ紹介記事」の校内での共有方法について） ・　ミライムの記事が多く、アプリ紹介記事に気付かないこともあった。 ・　記事を見て活用した方の感想等が聞けると、活用する職員が増えるのではないかと思った。 （アンケートについて） ・　アンケートの結果(ニーズ)と紹介したアプリがマッチしていたかどうかを知りたいと感じた。 ・　勉強会後にアンケートを実施して成果を確認しても良かった。

	（管理・運用について） ・　管理・運用については、校内研究で取り組むよりも校務部での取り組みの部分が多い。 ・　今後、校内研で取り組むのであれば管理運用はテーマから外してもよいと感じる。 （今後に向けてのアイディア） ・　アプリの活用と同じように、情報モラルについての実践の積み上げができたらいいと感じる。 ・　職員の働き方改革と ICT の活用をテーマに取り組んでも面白そう。 ・　ＩＣＴを導入したが、上手く活用出来なかった事例があると、検証ができ、活用がさらに広がると感じる。

2　ICT 実践研究班

（1）小学部音楽グループ

テーマ	「小学部音楽科の授業における効果的な ICT の活用実践」
研究目標	小学部の音楽科の授業において、ICT を活用した実践を行いながら、効果的な活用の方法を探る。
研究の実際	音楽科の授業においては、以下の様に、大きく３つの活用方法に分かれた。 ①　児童主体の活用･･･個別の支援としての活用（大型モニタと同じ画面を、手元の iPad に表示させる）、タブレットを使った音楽制作 ②　楽曲の意味理解を促すための活用･･･既存の動画、映像、イラスト、音など、ICT 機器を使用して提示 ③　オリジナルの教材を作成して活用･･･Keynote や iMovie、PowerPoint 等を使って、歌詞や楽譜をアニメーションやイラスト、文字等で視覚的に提示
成果	【児童】 本校は知的障がいの児童が在籍しており、視覚的な支援が有効な場面が多い。また、音楽科の授業の中では、楽譜や歌詞を読んで理解して表現すること、曲の情景をイメージすること等が難しい実態の児童が多い。そのため、ICT を活用し、楽譜を簡略化させるような形で、イラストや写真、アニメーション、文字等を組み合わせた教材を授業に取り入れることで、音楽の知識や理解がより深まり、主体的に音楽の授業に参加する姿が見られるようになった。 【教師】 上記の実態の児童であることから、コピーや切り貼り等をしての教材作成の準備の時間が削減された。また、ICT を活用することで、児童に伝えたい情報を音声や動画も含めて、より具体的に分かりやすく伝えることができるようになった。
課題	【児童】 音楽科の授業は学年一斉の指導形態で実施しているため、児童の実態差が大きく、見え方や聞こえ方の違い、理解力、音楽に対する興味関心など、実態が様々であることから、視覚支援としての ICT の活用が全ての児童に有効ではない場面があった。一斉授業では特に、個別の支援が必要であることを踏まえた授業づくりが大事である。また、ICT を活用してできるようになった（理解を促された）次段階の学習も検討する必要がある（手元の教科書の歌詞を見ながら歌唱をしたり、楽譜を読む学習を行ったりすることができる実態の児童もいるため、音楽科の学習を更に深めていくことができる授業づくりも考慮する）。 【教師】 ICT を活用することで授業準備の時間が削減された一方で、ICT 活用に特化し過ぎている傾向がある。特に音楽については、様々な楽器に触れたり、教師や友達との触れ合いも交えた身体表現をしたりするなど、実際に体験することで積み重なっていく力も多い。今後は、これまでの授業スタイルと現在のスタイルの良い部分を取り入れて、音楽の目標に沿った授業づくりを行っていく必要がある。

（２）小学部体育グループ

テーマ	「小学部体育科の授業におけるＩＣＴの活用実践」
研究目標	小学部体育科の授業において、ＩＣＴを活用した実践を行うことで、小学部体育科における効果的なＩＣＴの活用の仕方について探る。
研究の実際	各学年の体育の授業（体つくり運動、器械・器具を使っての運動、走・跳の運動、表現運動）における、ＩＣＴを使った自作教材の作成、それらを活用した実践、既存のアプリを活用した実践。
成果	【児童】 ・　取り組む動きを動画で示すことで、動画に注目したり、動画を見てその動きを模倣したりすることができた。 ・繰り返し動画を見て、動きを確認する様子が見られた。 ・　児童がしたい動きを選択できるような ICT を活用した教材の作成や提示により、活動に意欲的に取り組む姿や主体的に取り組む姿が見られた。 【教師】 ・　ICT を使って作成した教材を活用することで、一貫した指導が行えた。 ・　時間や場所を限定せずに、指導法の共通理解、教材の使用ができた。 ・　動画の使用により、動きの見本と言葉による指示を明確に分けることができた。 ・　職員間での教材共有、編集ができた。 ・　児童の指導に当たる職員の確保ができた。
課題	・　集団や個の実態に応じた ICT の活用 →実態に応じた効果的な ICT 活用の在り方（デジタルとアナログの併用） ・　機器の不具合による授業の中断 →　機器活用のための整備、職員の ICT 活用能力の向上及び臨機応変な対応

（3）小学部・中学部・高等部の実践事例について

小学部については、音楽グループと体育グループに分かれて実践的な研究を行った。中学部・高等部については、それぞれの学級等での実践を行った。小学部の各学年の実践や中学部・高等部のそれぞれの研究の実際については、巻末資料「ICT 実践研究班　実践事例集」に替える。

3　個別の指導計画の作成に関する研究班

テーマ	個別の指導計画
メンバー	小学部４名、中学部４名、高等部６名
研究目標	今年度より、様式変更になった「個別の指導計画」について記入方法の整理を行うことを目的とする。
研究の実際	◯　昨年度の形式の確認 ・　記載事項の整理 ・　学部別に注釈が必要な部分もあるが、共通する部分の整理 ◯　目標・評価について ・　今年度は３観点を意識し作成をお願いする。 ◯　書式について ・　ポイント数など
成果	・　校内研究の時間を活用できたことで、昨年度提示された個別の指導計画の形式を確認することができた。 ・　評価については、「各教科等をあわせた指導」ではなく各教科の目標に準じた評価の観点による学習評価をすることを確認することができた。 ・　校内研修の時間を活用することができありがたかった。
課題	・　個別の指導計画が県の共通様式に移行した。R3 年度は、形式の提示は行われたが中身についての研修は時間をかけることがなく、R4 年度から実際の運用が始まった。運用しながらの整理であったため「記入例」や「システム化」には至らなかった。今後も運用していきながら整理を進めていく必要がある。

4　新しい生活様式に関する研究班

研究テーマ	感染症対策を考慮した教育活動の実践
メンバー	小学部２名、中学部２名、高等部４名、養護教諭２名
研究目標	新しい生活様式の改善と実践及び ICT 機器の活用
研究の実際	①　配信動画の制作と配信 ・　長期休暇や連休に拝聴できる学習映像の制作 ・　やったぜカード（長期休業中の運動課題カード）とのリンク ・　実践動画の活用 ②　教育活動における取組 ・　給食指導 ・　運動会 ・　水泳指導 ・　新しい生活様式（みや央スタイル）
成果	・　動画配信は児童生徒と共通の話題となった。 ・　継続して取り組んでいた「やったぜカード」との連携ができた。 ・　学部を越えて教材研究ができた。 ・　感染症対策の変更点について、スムーズに対応できた。 ・　安全に体育行事を実施できた。
課題	・　配信に関する周知 ・　ICT 機器の取扱いや配信に関する規約等への知識不足

5　音楽科研究班

研究テーマ	感じ合う　響き合う　深め合う ～多様な子どもたちが主体的に学ぶ授業づくり～
メンバー	小学部４名、中学部２名、高等部４名
研究目標	多様な児童生徒一人一人が、生き生きと音楽活動に取り組むための授業づくりについて考えるとともに、音や音楽をとおした「自立と社会参加」のあり方を模索する。
研究の実際	本校の全体研究、及び本年度開催される九州音楽教育研究大会宮崎大会での研究を絡めることにより研修を深める。 【公開授業における研究の視点】 ①　何を学ぶかを明確にする ・　音や音楽を介した「コミュニケーション力の向上」「人とのつながり」 ②　どのように学ぶかを工夫する。 ・　対話的な音楽活動を取り入れた授業の展開 ・　即興的な音楽づくりを取り入れた授業の展開 ・　互いを認め合える授業の雰囲気づくり ・　外部講師招聘による授業 ・　教材教具の紹介や新学習指導要領についてなど、学部を超えた情報共有を行う。
成果	九音研公開授業に関する検討や音楽科免許所有者による専門性をいかした情報提供を行うことで、各々が様々な視点から音楽の授業を振り返り、これからの授業づくりについて考えるきっかけとなった。 【情報交換や意見交換した内容】 ・　現行の学習指導要領にもとづいた題材目標や評価基準の設定の仕方 ・　音楽的な見方・考え方の視点での授業づくりや指導の手立て ・　思いや意図をもった表現活動とそれを深める手立て ・　表現活動をするために必要な基礎的かつ効果的な技能について ・　児童生徒の実態に合った楽曲の取り扱い方や楽器の紹介 ・　音や音楽を介した他者とのつながりや社会参加の事例
課題	音楽科の担う役割について「特別支援学校における音楽活動は、児童生徒の実態に合った授業の創意工夫や他教科・領域と関連した指導により、生きる力の育成につながる」と考える。 今後も、児童生徒一人一人が「楽しさ」と「感動」を味わい、音や音楽を介して他者や社会とつながるような授業の工夫を目指す。

6　作業学習の開発に関する研究班

研究テーマ	自立と社会参加
メンバー	高等部６名
目標	自立と社会参加のための作業開発
研究の実際	①　看護補助、介護分野に関する内容 ・　宮崎医療センター病院より講師を招き実技講習の実施 ７月１３日(水)実施 ②　メンテナンス分野に関する内容 ・　株式会社ネクステージ宮崎北店による洗車実技講習の実施 １０月２８日(金)・１１月２日(水)実施
成果	・　外部講師による実技講習では、いつも以上に集中して取り組み、より専門的実践的な技能や知識を身に付けることができた。また、現場で働く人の姿を見ることで、卒業後の就労への意識を高めることができた。 ・　洗車の実技講習では、地域に出向くことで本校に関する理解啓発につなげることができた。生徒は講習で身に付けた技能を以後の洗車作業に生かすことができた。
課題	・　講習を受けるだけでなく、学んだことを実践できる地域の事業所を開拓し、作業学習の時間に取り組めるとよい。 ・　校内でも充実した作業学習ができるように環境を整えていけるとよい。 ・　障がいのある生徒や、障がい者雇用枠での就労についての理解を深めていけるとよい。

7　寄宿舎教育研究班

研究テーマ	これからの寄宿舎の在り方
メンバー	寄宿舎職員６名
研究目標	「寄宿舎の魅力発信」 ・　より多くの生徒に寄宿舎で学び、力をつけてもらいたい ・　学校、保護者、生徒に対し、寄宿舎を生活教育の場として認知してもらいたい
研究の実際	○　寄宿舎新聞発行 ・　各棟での取り組みのまとめとして寄宿舎新聞を作成し、校内に掲示。併せてPDF データをミライムで学校職員に全体発信。 ・　日々の生活指導や棟での余暇活動を中心とし、各棟持ち回りで作成。月１回の発行。 ・　毎月一番下段には「卒業生保護者の声」と題し、 寄宿舎に入舎するにあたる保護者の生の声を掲載。 ・　お楽しみ会やお別れ会など全体行事があった月は号外を発行。 ○　寄宿舎案内の作成 ・　寄宿舎がどのような場所なのか、わかりやすくまとめた資料を作成。 ・　気軽に手に取りやすい３つ折りリーフレット様式にまとめ、学校や保護者から問い合わせがある内容を精選し、掲載項目を検討した。 【掲載内容】 寄宿舎概要、日課表、生活の様子、年間行事、自治会活動、入舎の流れ、入舎に必要なもの、諸経費、寄宿舎見学、寄宿舎体験、寄宿舎目標、寄宿舎で目指す力　他 ・　オープンスクール、寄宿舎希望保護者説明会での配布。 ・　本校ホームページへの PDF データ添付。 ・　宮崎市、綾町、国富町計３カ所の各教育事務所への配布。 ○　寄宿舎体験 ・　小学部６年生から高等部３年生を対象に寄宿舎体験生を募集。 ・　１３名の応募があり、期間中に各生徒が１泊体験を行った。 小学部生、重複クラス生は 19：00 までの体験。 体験生内訳（小　男子１名　中　男子２名　女子３名　高　男子３名　女子４名）

成果	○　寄宿舎新聞 ・　寄宿舎新聞の作成により、魅力の発信と職員の意識の向上を図ることができた。 ・　生徒、保護者、学校職員など寄宿舎を知ってもらう機会が増えた。 ○　寄宿舎案内の作成 ・　誰にでも手に取りやすい形、簡潔でわかりやすい資料ができた。 ・　オープンスクール、保護者説明会、ＨＰ掲載、教育事務所への配布など多方面での活用ができた。 ○　寄宿舎体験 ・　新型コロナウイルスの影響により、予定していた３学期の実施はできず２学期のみの実施だったが、職員間で連携をとり無事に終えることが出来た。 ・　体験生の応募も小学部から高等部にかけて幅広く、寄宿舎を広く知ってもらう良い機会となった。
課題	○　寄宿舎新聞 ・　次年度以降も引き続き継続し、更に発展させていきたい。 ○　寄宿舎案内 ・　今後も活用方法の検討、配布範囲の拡大を考えていきたい。 ○　寄宿舎体験 ・　次年度以降に向け、反省を基に、寄宿舎体験のシステムを構築していきたい。

Ⅳ　研究のまとめと今後の展望

今年度は、昨年度から継続して取り組んでいる研究テーマの基、研究組織を大きく 2 つに分けて研究を行った。

一つは、県の研究指定を受けて行う GIGA スクール構想プロジェクト研究である。この GIGA スクール構想プロジェクト研究では、効果的な活用に向けての職員の専門性向上について取り組みやそれぞれの学級等で実際にどのように使っていくのか実践的な研究を行った。

もう一つは、日々の授業につながる研究として、「個別の指導計画に関する研究」、「『新しい生活様式』に関する研究」、「音楽科研究」「作業学習の開発」の 4 つの班で研究に取り組むこととした。

また、寄宿舎については、「これからの寄宿舎の在り方」という独自のテーマを設け、研究を行った。

今年度の研究の成果と課題について、主題設定の理由で述べた 3 つの課題に基づいて整理を行う。

第 1 の課題としては、現行の学習指導要領に対応した本校の教育活動の見直し、改善である。今年度、この課題についての取組としては、育てたい資質・能力の三つの柱を取り入れた個別の指導計画の新様式について、記入方法の整理を行った。その結果、書式や文章表現、学びの 3 観点を意識するということについては、確認を行い、一定の方向性を示すことができた。一方で、実際にどう書いたらよいのか、何を書いたらよいのか、については、十分に検討をすることができなかった。今後、実際の運用をしていく中で検討が必要になってくると思われる。また、学習集指導要領に対応した教育活動の見直し、という観点からは、年間指導計画を含む教育課程（学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を児童生徒の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画,文科省 2018）全体の見直しについて検討が不十分であり、本校にとって喫緊の課題と言える。

第 2 の課題としては、新たな学びに対する教育の在り方の模索である。今年度は、「新しい生活様式に関する研究」として、新型コロナウイルスの感染症対策を考慮した教育実践を昨年度に引き続き行った。実験的な取組として、長期休業中の動画配信など新たな学びのスタイルを提案することができた。また、自立と社会参加を目指した作業学習の開発の研究では、実際に学校外の企業と連携するなど、外部人材を活用した教育方法の提案があった。今後は、今回のような ICT の活用や外部との連携など、ますます必要になってくると思われる。

第 3 の課題として、ICT に関する課題が挙げられていた。今年度の取組としては、ICT 活用（主に iPad）に関する職員のニーズの把握を行い夏季休業中などに「iPad の基本、応用操作」、「iMovie（動画編集アプリ）の活用について」などのテーマで合計 6 回の研修会を開催した。また、研修会終了後、ICT 活用に関するアンケートを実施し、そこで出された疑問や質問などに、ミライムの掲示板や「おすすめアプリ紹介」の発行を通して、回答し、校内の ICT 活用を促進したのではないかと考える。ICT に関する実践では、小学部では音楽グループ、体育グループに分かれ 25 事例の実践研究を行った。中学部では、各学級の課題に応じた 18 の実践を行った。高等部では、学級の課題やグループの課題に応じて 19 の実践を行った。全体では、62 の事例研究を行うことが

できた。職員アンケートでは、「ICT 機器を使うことへの抵抗感が少なくなった」、「ICT 活用が広がった」、「様々な実践を見ることができてよかった」など、ICT 活用の基礎作りができたと言える。一方で、文部科学省が GIGA スクール構想の実現に向けてホームページで公開している「学校における ICT 環境活用チェックリスト」を見てみると、「健康面の配慮」、「校務の情報化の推進」、「安心・安全な端末活用」など、今後、検討する必要があると思われる。

以上、3 つの課題について、整理を行った。今年度までの 2 ヵ年の研究の成果として、ICT に関する課題については、多くの実践事例や研修も行うことができ、一定の成果が見られた。一方で「学習指導要領に対応した本校の教育活動の見直し、改善」や「新たな学びに対する教育の在り方」については、まだまだ検討の余地があると思われる。特に現行の学習指導要領が示しているキーワード（「社会に開かれた教育課程」、「カリキュラムマネジメント」、「育成を目指す資質・能力」、「主体的・対話的で深い学び」、「目標に準拠した評価とその観点」）については、検討が十分にできているとは言い難い状況であり、その理解と実践について学校を挙げて全力で取り組むべき課題と言える。今後、これまでの研究を基にしながら、これらの課題について取り組んでいきたい。

文部科学省ホームページ　「GIGA スクール構想の実現について」「学校における ICT 環境の整備・運用について」より学校における ICT 環境活用チェックリスト
（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_01798.html）
文部科学省（2018）　特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編（幼稚部・小学部・中学部）　開隆堂